

2011 年度を終えて

理事長 鈴木 充

まずは 2011 年度を終えるにあたり、我々の運動に多方面からご協力を頂きました関係各位の皆様とご指導ご鞭撻くださいましたシニアクラブ会員の皆様に心より御礼申し上げますと共に、何においても“熱き心に問え 真の豊かさ溢れる 心躍るあきたの未来のために”のスローガンの下、1年間私を支えてくれたメンバーの皆に深く、深く感謝申し上げます。

東日本大震災や、公益社団法人格移行に伴う様々な取り組みなど例年にはない多くの艱難辛苦を乗り越え、無事次年度に引き継ぐことが出来たのも皆様のおかげと強く感じると共に、生涯の中でこれほど人に支えられていると実感したことはありませんでした。そういった意味においても理事長という立場を努めさせていただいたのは本当に貴重な時間でした。

基本理念の愛するまちあきたの豊かな未来のために 知・徳・体を結集し不撓不屈の精神で挑み続けた結果がどうであったかを振り返ってみたいと思います。

《真の豊かさの伝播》

物質面ではなく、魅力あふれ、誇り高き秋田に生活できることの幸せを伝えるため、大切な人や愛する地域を想いながら「絆ハンカチ」を市民の皆様にご作成していただき、6日間に渡るぼぼろーどでの展示発表を通じて、「人・地域のつながり」の大切さを伝えてまいりました。時代や生活環境の変化に負けない心豊かなあきたを、訪れた方々はもちろん、マスコミ各社を通じて広く市民に発信することが出来ました。また、一年を通じて我々の住むあきたは重要無形文化財の登録件数が一番多くあったこと、犯罪件数が少ないこと、小中学生の体力学力が優れているなど、安定した地域コミュニティが在ればこそと思える、他の地域よりも優れているものが数多くあることに気付き、パネルディスカッションを通じて市民に伝播して締めくくることが出来ました。我々秋田人はこの優れたあきたに愛郷心を持ち、次代へとつなげていくことが大切だということを忘れてはならないのです。

《市民社会資本の構築》

関係諸団体や市民と連携して、あきたが誇る「たから」を最大限に活かした「秋田醸しまつり2011」を開催し、約4,000名もの集客となる事業を行ないました。地域発展へ繋がる市民社会資本の構築と、地域に根ざす運動へ結びつける事が出来たと感じております。正直、一年では構築の礎のきっかけしか出来ないのではと思っておりましたが、実行委員会を組織し、一過性のイベントとして終わることなく次の年へと引き継げたことは、今までの秋田青年会議所にはなかった新しい試みであったと思います。今後はこの市民社会資本をさらに練り上げ、将来的には県外へうってでて、県外からの資金を得ること、その先にはまた違った形の市民社会資本の構築に取り組み、より秋田の経済を豊かなものに

することを願っております。同時に将来の担い手となるリーダーの育成を目指し、個人が自律し、組織のビジョンを構築できる人物の育成を教わり、企業、地域が活力を生む事を学びました。その学びを経て、各個人がより明確な目標を掲げ、その目標を実現できるよう手法を学ぶことも出来ました。こうした強いリーダーが秋田の経済を牽引し発展させていくことが究極の目標であるし、自身そうあるために精進したいと思います。

《秋田の未来に夢と希望を》

風光明媚なあきたの美しい自然を次世代へ残していくためと東日本大震災の影響による節電の啓発に身近の自然を詠った風鈴を製作し、竿まつり期間中に展示し、市民の他、観光客へも秋田の身近な自然を感じていただくことが出来ました。また、原発問題の影響もあり外でサッカーすることの出来ない福島の少年サッカーチームを招き秋田のチームと交流試合を行い、その晩まならめで深く交流してもらいました。福島の子供たちに笑顔が戻ったのは勿論、秋田の子ども達もその現状に触れ、真摯に受け止めていた姿を見るとこの事業の素晴らしさがわかりました。5年目の集大成を迎える世代間協働事業も凧の製作を通じて多世代が繋がりを持ち、生きがいや感動を共有し、家族や地域がコミュニケーションを深めることが出来ました。圧巻であったのは東北の復興を願ってあげた最後の60連の連凧上げでした。いずれの事業も担当委員会の努力もありマスコミ各社に取り上げられ、多くの反響を得ました。秋田の未来に夢と希望を持っていただく事業は秋田青年会議所として、姿かたちは変わっても永遠に続く核となる事業であることは間違いありません。これが正解、これがゴールということはありませんから、後任の皆様にも奮起していただき、よりよい事業を展開してくれることを願っております。

《感謝・感謝・感謝》

目的には到達しなかったものの震災の影響で危ぶまれた会員拡大も、現状の中では満足のいく結果でありましたし、対外的には目立つことはないですが多くの事業を陰となり日なたとなり支えてくれた総務や事務局のメンバーの活躍も見逃すことは出来ません。そして、日本JC総務グループ担当常任理事として出向いただいた小畑監事や秋田BLの監査担当役員として出向いただいた川口直前理事長、わんぱく相撲運営委員長として出向いただいた桐生謙吾君らをはじめとする多くの出向メンバーの活躍にも深く感謝するところでございます。おかげさまで諸大会への参加者も相当数にのぼり、皆多くの気付きを得て、その知識をあきたの街づくりに還元していくことが出来ました。

成功を目指し皆動いてくれました。皆様自身成功を感じ取ることが出来たでしょうか。100%の成功はなくとも、そこに歩いていったときに成長していく自分に気付いた方は多かったと思います。修練の場であるJCはそれでもよいのです。次年度以降活躍される方々も成功を目指して成長していきましょう。

結びになりますが、私に一切の不便もかけなかった二度目の女房役であった田口専務、そして専務を支えた伊藤事務財政局長や次長の皆様、松澤事務局員、至らぬ点の多い私を支えていただきありがとうございました。そして、私の理不尽な要求に応えてくれた理事会構成メンバー、委員長を支えてくれた全てのメンバーに心の底から感謝申し上げ、皆様のさらなる飛躍を願い理事長としての報告に代えさせていただきます。

卒業を迎えて

直前理事長 川口雅丈

本年度、直前理事長として13年に及ぶ現役生活を終わらせていただきます。

直前理事長の立ち位置とはどのようなスタンスなのか？ 昨年の予定者の際、最初に考えたことあります。理事長経験者として理事長の良きアドバイザーになることなのか？理事長が伝えきれなかったことを伝える存在になることなのか？時には叱り、時には励ますなどすべきか？自分にその役が務まるのか？様々なことを考えた時から一年が過ぎようとしております。

新年例会が終わり、昨年の担いが本当に終わった時、満足感と一抹の寂しさを感じたことを記憶しております。3月には東日本大震災が起き、4月には理事長曰く2度目の災害があり、自分の生活が一変し、公益法人格取得に向けた基金管理委員会を欠席、2012年度理事長当選者が決定した理事会も欠席してしまいました。メンバーに支えられて過ごした昨年の分まで、本年度支えていかなければならなかった。自分は直前理事長として何もしていなかったと自責の念で原稿を書いております。本当に申し訳なく思っております。

JCは自分に何を与えてくれたのか。自分はまじめではなかった。何をする団体なのかもよくわからずに入会し、多くの先輩方とお酒を含めて時間を共有してきた。いつの間にか多くの時間と思いの共有に膨れていった。言われたことだけは一生懸命にやった。いつの間にか理事としての機会をいただいた。はじめて学ばなければいけないという気持ちになった。学ぶ気持ちになって、今まで無駄な時間を過ごしてきたことに気が付いた。理事長をさせていただいた。多くの方々にご迷惑をおかけした。多くの方々に支えていただいた。自分の言葉の責任について考えた。青年として何をなすべきかを考えた。

何もなかった自分に多くの財産を与えてくれたJC。多くの皆様に育てられ、助けられ、支えていただいたJC。

ありがとうございました。

13年間本当にお世話になりました。

2011年を終えて

副理事長 小松貴

昨年に引き続き二度目の副理事長を務めさせていただきました。鈴木理事長には今までの経験を活かして欲しいと言われましたが、理事長が期待された職務を全う出来たかは自信がありませんが、自分なりに一生懸命努めさせていただきました。また、重ねて復興支援本部長という役職を理事長に与えていただき、多くのメンバーに協力をいただき、釜石等へ支援ボランティアに行きました。

担当させていただいた地域創造室は、青少年育成委員会と真の豊かさ発信委員会の二委員会でしたから構成されており、青少年育成委員会はわんぱく相撲秋田開催を6月例会として主管いたしました。久々の秋田での開催となり、以前の反省を生かし五城目でLOMメンバー協力のもとで開催いたしました。また事業として、3月11日に起こった東日本大震災の被災された福島の子供たちを招待し、秋田の子供達とサッカーなどを通じ交流し、秋田の子供たちに現状を伝え考えてもらいたいという想いから事業を開催いたしました。多くの方々の協力もあり秋田に来た子供も迎えた子供もとても良い思い出が出来た事業になったと思います。

真の豊かさ発信委員会は、一言で言うととても難しい委員会でした。何もラストの年に...と思ったことも多々ありましたが、志摩委員長を上手く指導された高橋常任理事のおかげで無事ぼぼろーどでの事業や11月例会を開催できました。詳細につきましては常任や委員長がご報告すると思いますので割愛いたしますが、委員会メンバーの団結力が素晴らしく感じた委員会でした。

最後になりますが、この様な機会を与えて下さった鈴木理事長をはじめ、メンバーの皆様にご感謝いたします。平成8年入会しとても長かったJCライフでしたが、皆様のご協力をいただき全う出来ましたと思います。この場をお借りしまして御礼申し上げますと共に、私の年次報告とさせていただきます。本当にありがとうございました。

2011年度を終えて

副理事長 能登谷 正人

はじめに、今年度は副理事長という大役を仰せつかりましたが、鈴木理事長をはじめ三役・常任、そ

して会員の皆様のお力添えにより 2011 年度を終えることができたことに心から感謝を申し上げます。また、自身にとっては J C の最終年度でもあり、これまで一緒に活動してきたメンバーや各場面でお世話になった諸先輩の皆様にもこの場を借りて感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

さて、今年度私が担当させていただいたのは加賀屋常任率いる未来企画室の 60 周年企画準備・情報発信委員会と市民社会資本構築委員会でした。60 周年企画準備・情報発信委員会の細谷委員長におかれましては、新任理事ということもあり山有り谷有りの一年間ではございましたが、HP の運営やメディアへの露出強化に対し、各事業には率先して自らが最前線へ出向く前向きな努力には、一回りも二回りも成長してゆく細谷委員長の姿がありました。市民社会資本構築委員会の菅原委員長におかれましては、市民社会資本の構築に向かって彼の持っているリーダーシップを如何なく発揮し、実行委員会では様々な団体を纏め上げ、9 月に行われました『2011 秋田醸しまつり』では約 4000 人の参加者の前で実行委員長として堂々たる姿を見せておりました。両委員会が素晴らしい形でゴールを迎えることができたのは、日本 J C への出向を兼務しながら、両委員長に対し飴と鞭を的確に使い分け、指導とサポートをしていただきました加賀屋常任のおかげであり、彼の力量には本当に頭が下がる思いであります。ラストイヤーを迎えるにあたり、この両委員長、常任理事と共に歩んできた一年間は自分にとって非常に刺激的で有意義なものであり、本当に感謝・感激の連続でありました。

入会から 5 年という短い期間ではございましたが、思いやりのある素晴らしい諸先輩や、やる気・元氣溢れるメンバーに囲まれ、沢山の出会いや体験、学びを得ることができ、幸せな時間を過ごすことができました。5 年間の中でも、本年度は卒業というステージが存在したからこそ、新鮮で感慨深いものになったかと思えます。卒業後は J C で経験したことを活かし地域社会発展のために寄与したいと思っております。

最後になりますが、鈴木理事長の思いを汲んで私が活動できたかどうかは自分では判断できませんが、加賀屋常任、細谷委員長、菅原委員長をはじめとする委員会メンバーの活躍は間違いなく心躍る秋田の未来を感じるものがあつたと感じております。この様な機会を与えていただいた鈴木理事長をはじめとする L O M のメンバー皆様に心より感謝申し上げます、報告とさせていただきます。本当に有難うございました。

2011 年副理事長職を終えて

副理事長 武石純

今年度、初の副理事長という役職に任命された事にまずは感謝申し上げます。初めての役職という事

もあり、今までの常任職には無い緊張感とその重要性に慣れるまで、少々時間がかかったように思います。

そして、副理事長として多くの伝統の受け渡しがある事を覚えました。それにはやはり今までやってきた事を今一度見直すと共に隅々まで見逃さない洞察力が必要だと感じました。そうやって今まで私が委員長・常任時代に副理事長から受け継いだ事の伝統と自分で感じ取った物の伝播がよりよい事業を生む事の気づきを得ました。

恐れ多くも指示する立場にあり、よりよい事業を委員長の皆様が組み立てるべく確たる部分を的確に示唆する事の大切さにも気づきました。

副理事長の役割として、直接的に理事長を支えていく部分。そして執行部としての責任という部分。それら大切な部分を今年一年間学ばせていただき、多くの支えとなれた事、組織の一部になれた事に感謝いたします。

2011年を終えて

副理事長 山陰 逸郎

本年、鈴木理事長よりお声掛けいただき副理事長の大任を仰せつかりました。

「人間の魅力向上室」として、老若男女問わずその魅力をいかんなく発揮した鈴木亮常任理事のもと、仙北谷委員長率いる世代間協働推進委員会並びに吉川委員長率いる企業・人間力向上委員会を担当させていただきました。

世代間協働推進委員会は、55周年の際提唱された「ふれ愛・認め愛・助け愛」の三愛精神のもと各世代が交流を通じて絆を深めようという主旨で、本年は5年目となる集大成の年でもありましたが、仙北谷委員長のガッツと委員会メンバーのサポートで、見事すばらしい事業が展開されました。また企業・人間力向上委員会では、企業力そして人間力のアップという2つのテーマが与えられているなかで、社員一人ひとりの資質や魅力の向上こそが企業活性化に繋がるとして、吉川委員長の熱意と委員会メンバーの積極的な参加で、年に2回の例会にたくさんの聴講者を迎え開催されました。鈴木亮常任理事においては、その2委員会の良き理解者そして指導者として、留守がちな私に代わり両委員会を成功へと導いていただきました。

自身では、日本JC出向の任で十分な指導もできず、常任理事そして仙北谷委員長、吉川委員長には大変ご迷惑をおかけしたものと思います。次年度においては、3人とも常任理事として指導する立場になられますので、経験を活かし頑張ってください。

最後になりましたが、本年副理事長として鈴木理事長の「熱い心」へどれだけこたえられたかは、私

個人として猛省するところではございますが、担当させていただきました両委員会事業の成功をもってお許し願えればと思う次第です。貴重な経験を与えてくださいました鈴木理事長並びにともに頑張ってくださいました「人間の魅力創造室」鈴木亮常任理事、仙北谷委員長、吉川委員長、そしてメンバーの皆様には感謝申し上げます。

2011年度を終えて

副理事長 進藤 史明

鈴木理事長より副理事長を任せられ、1年間職務を全うすることができました。総務室の担当でしたが、木村常任理事の活躍により総会5回開催を無事に終えることができました。丸野内委員長の率いる総務委員会はまとまりがあり、申し分のない委員会でした。副委員長、運営幹事はもちろん、メンバーもベテラン揃いで、何も心配する必要がありませんでした。

また、公益法人特別会議の議長として、公益法人格移行申請について、LOMメンバーと議論を重ねてまいりました。当初の6月申請には間に合いませんでしたが、8月末には申請書類をまとめて、県の担当者へ提出することができました。元々、申請してから勝負であることがわかっておりましたが、次年度理事長に立候補することになり、木村副議長一人に任せきりとなってしまったことが、本年度認定をいただけなかった大きな要因ととらえています。また、会議に参加いただいたメンバーの皆様には、しっかりと引き継ぎをしておくべきでありましたが、今後の対応を任せることのできる担当者を育てることができなかったことも後悔していることでもあります。

公益法人格取得には、大きなハードルがあります。それは、公益目的事業比率50%以上ということですので。これまで、数年に亘り、管理費の削減と公益目的事業の拡大を行ってききましたが、管理費の削減が思うように進まず、LOMの財政をひっ迫させる結果を招きました。大きな要因は会員の減少であります。会員の拡大が想定どおりにいかない現況を鑑みると再度、公益法人格の取得を目指すべきか、否かを検討する必要があります。青年会議所運動は何のためにやっているかといえば、まさに公益であります。現制度における公益法人としてのハードルを越え続けることは非常に厳しい茨の道となるのが想定されます。次年度以降も引き続き議論し、まちづくり運動に注力できる組織づくりを目指すべきで、公益社団法人でも一般社団法人でも為すべきことは同じであると考えます。

次年度は理事長として、創立60周年の節目にしっかりと今後の方向性を指し示し、今後も社団法人秋田青年会議所があきたのまちづくりにしっかりと貢献し続けることができるようにしたいと考えております。3.11の未曾有の大震災のように環境は常に我々に試練を与えてきます。その全てを貴

重な機会と捉え、前向きにチャレンジしていくことが青年会議所運動であり、我々に課せられた使命であります。

JC、仕事に注力でき、長男も生まれ、大変充実した1年を過ごすことができました。貴重な機会を与えていただいた鈴木理事長には大変感謝しております。次年度は更に精進し、しっかりとバトンを繋いでまいります。

2011年を終えて

専務理事 田口正人

2011年は、自分にとっても激動の1年であり、決して忘れることのできない1年となりました。恒例の初詣を皮切りに、新年例会や各種団体の新年会など、忙しく過ごさせていただいた1月を無事乗り切り、2月例会では会員拡大交流委員会の例会を行い、いよいよ本年度の事業にむけての一步を踏み出そうとしていた3月11日、多くの人の運命を変えた東日本大震災が発生しました。3月例会当日であり、携帯電話もつながりにくい状況、停電となり信号も消え、街は大渋滞。私も必死になって、自宅まで帰ったことを記憶しています。ただ、当初は表面的な被害が見えなかったため、今までよりも少し大きな地震が発生したとしか思っていませんでしたが、それを一変させてしまったのが、車に搭載してあるテレビでした。あまりの光景に、言葉も出ず、ただだまって見続けていました。我々は、地域のために日夜運動している団体ですが、被災地では、その地域が自然の力によって破壊されていました。一人の人間としてなんともできない無力さに痛感させられました。この秋田においても、ガソリン不足など、日常生活もままならず、JC活動、運動にも大きな支障をきたし、大いに悩んだことが今でも忘れられません。

ただ、2011年度は今から考えると、我々にとっての大きな転換期のような気がします。戦後、先輩諸兄が日本復興のため立ち上がった創始の精神と同様、我々もこの日本、そして東北を復興させる使命を与えられたのではないのでしょうか？我々は先輩諸兄のおかげで、不自由なく幼少期を過ごさせていただきました。しかし、高度経済成長時代のような成長も望めない時代に突入し、我々は先行きの見えない時代に入り、今こそ我々は変革の能動者としての真価を発揮する時が来たように感じます。

2011年度は専務理事というのは非常に重責な役職であると痛感いたしました。ただ、責任ある役職だからこそかもしれませんが、その分充実した1年であり、非常にいい経験をさせていただきました。こなした役職のことしか言えませんが、皆さんもぜひやれるチャンスがあればやってください。自分にとって絶対にプラスになります。専務理事という役職を与えていただいた、鈴木理事長に感謝するとともに

に、災後社会の復興の担い手として、専務理事で培った経験を生かして、秋田の明るい豊かな社会構築のために今後も邁進したいと思います。

2011年度を終えて

監事 加藤 誠

『えっ？なんで俺が監事？？』私が鈴木理事長からお誘いをいただいた時の心の中の第一声です。

自分の考える監事のイメージというのは経験豊富で会議や活動に対しての視野が広く的確に言葉で伝えられるというのが監事のイメージで、全く正反対の自分には監事が務まるのかかなり悩みました。ですが新任理事同期の理事長からのお誘いだったので、背伸びをせず自分なりの言葉で伝えようと思い引き受けさせていただきました。

もともと人前で話すのが苦手な私はその場その場ではなく一年を通じ自分なりに伝えたい事を話そうと思い、三信条でもある『友情』というテーマを持ち監事講評をさせていただきました。

私なりに経験した事や客観的に見て感じた事を勝手に話させていただきましたが、メンバーの皆様に伝えたい事を伝えられたのが非常に不安ですが、自分なりの言葉で話せたので今はホッとしています。

来年は秋田青年会議所にとって60周年という節目の年にあたりますが、ぜひ『友情』を基に会員同志が手を取り合い今後躍進し続ける事をお願い申し上げます。

最後に、一年に渡り言葉足らずで聞き苦しく拙い監事講評にお付き合いいただきまして会員の皆様とこのような貴重な経験を与えていただいた鈴木理事長に心より感謝申し上げます。

2011年度を終えて

監事 長谷川 尚造

3月11日に発生した東日本大震災は、地震発生時の我々の想像をはるかに超える甚大な被害を引き起こし、原発事故、そして物資やエネルギー不足により、企業活動はおろか普段の生活にも多大な影響と底知れぬ不安を抱かせるまさに未曾有の出来事でありました。

誰もが羅針盤を持たない航海を余儀なくされたこの年でありましたので、「今年の秋田」Cの運動や活動は計画の半分も出来れば・・・」というのが偽らざるところでありました。

しかし、結果から言えば当初予定していた殆どの事業を見事に遂行したに留まらず、迅速に被災地へ

赴き支援活動を継続的に行い、一方では外出もままならない被災地の子供たちを秋田に招き自然に親しむ事業を行うなど、まさに「熱き心に問え！」という今年のスローガンを見事なまでに全メンバーが情熱と行動力をもって体現してくれた一年でありました。

また、底の見えない不況に加えての震災でしたので、例年以上のメンバーの離脱や会員拡大の苦戦も覚悟しておりましたが、退会者を最小限に留め、多くの新入会員を仲間に加えたことも本年ゆえに特筆すべきことだと思っております。

愛して止まない秋田JCを去る今年、愛するが故に沸き起こってしまいがちな現役メンバーに対する不安や不満……。しかしそんな思いなど今は微塵もありません。

むしろラストの年にこんな熱い情熱を持ったメンバーが本当に沢山いることを再認識させてくれたこと、そしてこんな時代にこそJCの存在意義があるのだということを改めて痛感させてくれた皆さんに心から感謝しております。

気概と誇りを持った人間の言動は、必ず人々の心を動かします。誇りを持つこと、それは自分自身が何のため、誰のために生きているのかを確信することだと思っています。誇りを持つことは簡単なことではありませんが、震災を経て自分が何のため、誰のために生きているのかを考えさせられた本年に自らのことに留まらず地域のために情熱を注いだその姿は、必ずや多くの市民の心に深く刻まれたものと確信をしております。どうかこの気概と誇りをこれからも持ち続け、そしてこれからも内外に伝え続けて下さい。

最後になりましたが、激動の本年、熱くも強い心でメンバーとLOMを牽引して頂いた鈴木理事長、そしてLOMを見事に支えてくれた役員と全てのメンバーに心から感謝申し上げ報告とさせていただきます。一年間、本当にありがとうございました。

2011年を終えて

監事 小畑 宏介

2011年度を終えるに当たり、ご支援・ご協力を賜りました関係各位のみなさまに衷心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

また、一年間を通じて私を支えていただきました、鈴木理事長をはじめとする現役メンバーのみなさま、そして常にご指導と温かい激励をいただきましたOBのみなさまに、あらためて感謝を申し上げます。

2011年度、秋田JCにおきましては監事という役職を頂戴し、与えられた担いを確実に遂行でき

なかったことが誠に残念であります。2011年度の秋田JCは、鈴木理事長の卓越したリーダーシップのもと、地域に根ざした、また、地域に住まう人たちと心を通わせた事業を数多く行ったと思います。また、何よりも、3月11日に発生した東日本大震災という大きな困難がありながらも、秋田JCの歩みを止めることなく、青年の活動・運動を、この「あきた」において迷うことなく継続したことが、かけがえのないことであると思います。そのことは、きっと創立60周年を迎える2012年度の活動・運動に向けしっかりと繋がり、より発展的なものになると確信をしております。

結びに、あらためて、メンバー、OBのみなさまに御礼を申し上げますとともに、2011年度ご卒業をされます2000年代の秋田JCの運動を創られた46年生のみなさまに心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

2011年を終えて

常任理事 総務室長 兼 公益法人特別会議副議

木村 昭彦

本年度、常任理事総務室長兼公益法人特別会議副議長として、総務委員会と公益法人化に伴う実務を担当いたしました。

丸野内委員長率いる総務委員会においては、議事録・基本資料・会員名簿の作成という通常業務に加えて、1・7・9・11・12月の総会開催および7月の移動例会（大曲開催）等、多くの設営を行うこととなりました。会員減少に伴う小さな体勢の中、濃密なスケジュールリングと委員メンバーに対する働き掛けにより、これらを完遂した委員長の努力には頭が下がります。委員長自身、年度当初の「右か左か、どちらを向いたら良いか分からない」雰囲気から、昨今の「落ち着き」を醸し出す所を見、成長をも感じた次第です。この「完遂・成長」は、次年度の公益法人申請に当たり資料上貴重なものとして、そして委員長自身の成長として、来年度以降「プラス」になる事を確信します。

また本年度、私自身公益法人社団格への移行申請業務を担いました。当初予定の6月申請は間に合わず8月末の申請となりましたが、結果から申し上げますと「失敗」だった様に思われます。原因は、書類作成の不備・申請期間と役員任期(定款上の問題)との兼ね合いに起因するものでした。震災に伴う作業停滞があったとはいえ、ひとえに私の見通しの「甘さ」があった事は否めず、大いに反省する次第です。失敗により「再申請」となりましたが、2月の再申請に向け業務にいそしみたいと考えております。

最後になりますが、協力をいただいた皆様に感謝を申し上げたいと思います。この一年については、

常任理事としての指導力の不足・公益申請作業におけるスケジュールリングがうまくいかなかった事、自身の仕事とJCの兼ね合いに手間取ったこと等々がありました。それにも関わらず一応の責任を遂行できたことは、鈴木理事長より業務内容を把握しつつ「一委員会」担当の常任理事として指名を受けた恩義と、進藤副理事長より公益法人化業務に関し後押しいただいた事、丸野内委員長による積極的な委員会運営、以上があったからこそ「常任理事兼公益法人特別会議副議長」という責任を遂行できたと考えております。この場を借り厚く御礼申し上げますと共に、来年の業務を全うする事を申し上げる次第です。

2011年を終えて

常任理事 地域創造室長 高橋 大輔

本年度、常任理事地域創造室長として、青少年育成委員会と真の豊かさ発信委員会を担当させていただきました。

まずは青少年育成委員会についてですが、わんぱく相撲秋田ブロック大会が秋田JCの活動エリアで開催されるという事で、例会に併せ主管LOMとして対応させていただきました。秋田ブロック協議会との調整など課題はありましたが、当日は大きな事故もなく運営できたのではないかと思います。当日は妻の出産と重なり、参加することができずLOMメンバーには大変ご迷惑をおかけいたしました。

また、8月には東日本大震災の影響で屋外活動を制限されている福島市のサッカースポーツ少年団をお招きした事業では、タイムリーであったこともあり、大変効果のある事業だったと思います。その後の対応で不備があり、残念な部分がありましたが三浦委員長には今回の失敗を重く受け止め今後の活動に活かしていただきたいと思います。

真の豊かさ発信委員会についてですが、志摩委員長をはじめ委員会メンバーには私自身の指導力不足により、大変不安を与えてしまったように感じます。しかしながら、最後には志摩委員長の素晴らしい委員会運営によりメンバーが一丸となり、委員会の担いをしっかりと果たしていただいたと思います。志摩委員長には今回の事業立案の難しさや苦労、事業成功までのプロセスや感動を、今後を担う理事委員長に常任理事という立場でお伝えいただきたいと思います。

そしてなにより、今年度は私自身が一番勉強をさせていただいた様に感じています。ラストイヤーの小松副理事長に心配を掛けっ放しだった事について本当に申し訳なく思っています。小松副理事長をはじめ当室の運営にご協力いただきました皆様に心より御礼を申し上げます。

2011年を終えて

常任理事 未来開発室室長 渡辺 毅

本年度、未来開発室長として、会員拡大・交流委員会と環境運動推進委員会の二つの委員会を掌握し、所務を処理して参りました。

会員拡大・交流委員会は根田委員長のもと、30名の会員の拡大をもっとも重要な目的として活動した結果、14名の新入会員を獲得しました。2月例会でメンバーの拡大意識を高めることが出来たにもかかわらず、目標人数の半数にも届かなかったことについてはひとえに私の責任であり、深く陳謝いたします。原因としては震災の影響もあったと考えられますが、1カ月ごとのこまめな計画、進捗確認、目標の再設定といった部分を漫然と進めてしまったためと考えております。一方、新入会員のフォローという部分では、本年度は近年まれにみる成功を収めたと思います。委員会の仮会員に対する真摯な姿勢と配慮によって、仮会員のモチベーションを高め、出席率は一年を通じて非常に高いレベルでした。また、シニアクラブ会員との交流会においては大勢の先輩方にいらしていただき、おおいに盛り上がり交流を深めることができました。これは、先輩方から高評価をいただいた委員長自作のチラシによる募集、そして委員会メンバーによるテーブルの進行にて先輩方のお話をうまく引き出した結果だと思えます。1年ぶりに復活させたJCスクールの設営では、失敗できないセレモニーの部分を委員会一丸となって綿密に打ち合わせ、リハーサルを行なった結果、万事スムーズに終わることができました。

塚田委員長率いる環境行動推進委員会は、風光明媚なあきたに誇りと愛着をもってもらえる運動を、一年を通じて実施して参りました。まずは4月のサケの稚魚放流事業からスタートした本委員会ですが、常任理事会でサケの稚魚放流事業当日の寸劇を披露するなど、当初から委員会のパワーは素晴らしいものがありました。当日は残念ながら雨天のため寸劇はお蔵入りとなりましたが、安全管理および運営を徹底し事業自体はしっかりと終わることができました。7月から8月にかけては2011環境運動推進事業ということで、あきたの夏をイメージした絵風鈴を小学生とともに作製、それに身近な自然を俳句に詠んだ短冊を下げた展示することで、市民に地域の身近な自然に目を向けてもらい、それを大切にす意識を醸成すること、そして節電に繋げることを試みました。7月当初から委員会では何度も小学校や児童館に足を運び、またぼぼろーどで行なった大作製会、そして翌週の事業発表の展示ブースも二日間と、委員会メンバーには相当負担がかかっておりましたが、塚田委員長のリーダーシップにより一丸となって成功に結びついたと思えます。また、マスコミや学校関係者の反響が大きかったのは委員長の着眼点が優れていた証左であると思えます。9月例会においても、委員会メンバーによるテーブルディスカッション、そして例会が終わった後もそれを踏まえた身近な自然の写真撮影とそのインターネット

上へのアップということで、最後までメンバー全員が委員会を楽しみながら、頑張っていました。

根田委員長、塚田委員長ともに本年度初めての理事委員長でした。当初は理事会での発言すらおぼつかない二人でしたが、一年を通じて、委員会の運営、事前準備の大切さ、自分の意見を人に伝えるスキル、その他さまざまな青年会議所の理事としての能力を身につけました。ご担当いただいた武石副理事長から、委員長のやる気を伸ばすような、心温まるご指導をいただいたおかげだと思います。2012年度は二人の委員長とも本年度の経験を十二分に活かし、益々活躍してくれるものと信じます。

2011年を終えて

常任理事 未来企画室室長 加賀屋 久人

2011年度、二年目の常任理事を務めさせていただきました。担当した両委員会（60周年企画準備・情報発信委員会、市民社会資本構築委員会）とも非常に重要な担いを持つ委員会ということもあり、自分に能力的な不安感じながらも、気合いを入れてスタートを切りました。しかし、その矢先に祖母・父と相次いで他界、大事な年初の期間に常任理事として職務を放棄せざるを得ませんでした。さらに、やっと復帰し迎えた市民社会資本構築委員会の担当例会当日に東日本大震災発災。事業の概念を伝える大事な機会を逸し、その後事業展開に影響が出るのは避けられませんでした。

60周年企画準備・情報発信委員会では、既存の広報手法を見直し、より効果的な物とすべく、例会を開催。その後の事業等が相次いでメディアに取り上げられる等、その効果は少なくないと考えます。しかし、60周年に向けた企画・準備については、アクションプログラムを取りまとめが遅れ、年内一杯業務を残してしまいました。次年度以降に向けた展開についてはあまり寄与できなかったと思います。

市民社会資本構築委員会は、震災後、立て直しを図り、例会で伝えることを資料としてメンバーに発信。秋田の発酵文化に焦点を当て、各種団体と幅広く関係を持ち、実行委員会を組織。「秋田醸しまつり2011」の大成功により与えられた担いをほぼ完遂したと考えます。必ずや次年度に繋がる事業になると確信をします。

常任理事としては、12月例会並びに卒業式を担当。本年度を振り返り、次年度への引き継ぎ、そして11名の卒業生を送り出す、その全てにおいて全力であたらせていただきました。

様々なことがありましたが、担当両委員長並びに委員会スタッフ・メンバーに助けられ、無事一年を終えようとしています。担当副理事長の能登谷正人君もご卒業生であるにも関わらず、本当に助けていただきました。今年関わった全ての方に忠信より御礼を述べさせていただき、以上報告といたします。